

令和４年度 徳島県立徳島北高等学校 学校評価総括評価表

1 徳島北高等学校のスクールミッション
英語教育をリードする学校として、英語の４技能をバランスよく高める授業や大勢のＡＬＴと英語のみで過ごす「English Day」、「海外語学研修」などの活動をととして、国際的視野を持った「グローバル人材」に必要な力を育成します。

- 2 スクールポリシー
- (1) 自ら課題を見だし、主体的に学びに向かう力を育成します。
 - (2) 知識・技能を活用し、他者と協働して課題を解決する力を育成します。
 - (3) 人権を尊重する豊かな心と異文化理解の精神を育成します。
 - (4) 確かな英語力とコミュニケーション能力を育成します。(普通科)
 - 豊かな英語力とコミュニケーション能力を育成します。(国際英語科)
 - (5) 国際的視野を持ち、持続可能な社会の形成に貢献する力を育成します。

3 本年度の取組

＊ 総合評価：目標を大きく達成…Ａ、概ね目標を達成…Ｂ、目標を達成できなかった…Ｃ

重点課題	重点目標	評価指標（と活動計画）	評 価		学校関係者評価	次年度への課題と方策
1 人権教育	①すべての教育活動を通じて実施 ②生徒・教職員が共に意識高揚	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	「人権だより」を読んでいる生徒の割合を上げるには、読む時間を確保するなか、読みたくなる内容に改善する方法が考えられるのではないか。生徒と共に改善方法を考えてほしい。	「人権委員会だより」については、今年は全生徒に配付したが、発行回数が昨年度より減少したこともあり、読んでいる生徒の割合が昨年同様に留まった。次年度は、内容の吟味はもちろん発行回数、ＰＲ方法等について大幅改訂しようと考えている。
		①「人権意識が高まった」と答えた生徒の割合を85%以上にする。 ②-1 「人権委員会だより」を読んでいる生徒の割合を65%以上にする。 ②-2 教職員の校外における人権講演会や研修会の参加を一人1回以上にする。	① 89%で評価指標を達成した。 ②-1 41%で評価指標の達成はできなかった。 ②-2 評価指標を達成した。	(評定) B		
		活動計画	活動計画の実施状況	(所見) 今年度は、3年ぶりに演劇鑑賞会を実施することができ、演者との意見交換会やセットの撤収作業にも多くの生徒が自主的に参加した。感想文からも、生徒が人権問題に対して主体的に考え、自分のこととして考えようとしていることがわかった。		
		①人権ホームルーム活動や学校行事等で、自分の意見を発言し、他人の意見もしっかり聞くことができるなど、主体的に参加・体験をさせる。 ②「人権委員会だより」を生徒主体で作成し、ホームルーム活動などを利用して、人権委員に記事を紹介させるなど生徒主体の活動を活発にする。	①昨年度より班別学習の機会が増え、互いに意見交換ができ、主体的に取り組むことができた。 ②今まで教室掲示をしていたが、全生徒に配付して家庭への持ち帰りを呼びかけたが、読んでいる生徒の割合は低かった。			
2 学習指導	①学習習慣の確立 ②主体的・対話的で深い学びに向け、指導と評価の一体化による授業改善 ③1人1台末端などのICTを活用して、個別最適・協働的な学びの推進	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	学習時間を「確保できていない生徒」と「確保していない生徒」とではその原因が異なるから、確保できていないなら確保できるよう支援することが必要であり、確保していないならその原因が何かを明らかにしなければいけないと考える。	初期指導がその後の高校生活に大きな影響を与えるのは明らかで、担任や教科担任を中心に具体的にアドバイスを行う。また年間を通して個人面談を継続し、担任が具体的なアドバイスを行えるよう、面談で取り上げるべき項目を共有し、生徒に明示する。 補習で扱う内容を精選し、生徒が学力の向上を実感できるような取組を推進する。 授業で扱うべき内容と授業外で取り組むべき学習課題を明確にし、家庭学習と授業の連動や授業を通しての学力の向上を生徒が実感できるように、さらなる授業研究や改善に努める。また、生徒が
		①-1 平日の家庭学習（塾等での学習を含む）が1時間以上の生徒を90%以上にする。また、休日の家庭学習（塾等での学習を含む）が「(学年)＋1」時間以上の生徒を80%以上にする。 ①-2 「午後9時までに家庭学習を始める」習慣が身についている生徒の割合を70%以上にする。 ①-3 1,2年生の学年単位で、補習の出席率を95%以上にする。 ②-1 「学校の授業内容は、自分の学力を高めるのに役立っている」と回答した生徒の割合を80%以上にする。 ②-2 校外模試における各科目の校内平均点が全国平均点以上となるようにする。 ②-3 教員の教科指導研修会への参加率を高め、教員間での情報の共有を拡充する。 ③ICT機器を用いた授業を充実させるため、ICT関連の教職員研修を年間2回以上実施する。	①-1 9月の第2回調査では、学習時間が1時間以上は、1年生86.7%(88.3%)、2年生85.3%(86.5%)、2時間以上は、1年生58.6%(73.3%)、3時間以上は、2年生24.9%(53.4%)であった。学習時間のさらなる確保が課題である。(括弧内は休日) ①-2 1年生62.2%、2年生65.8%で1,2年ともに目標を下回った。 ①-3 1年生95.5%、2年生92.5%で概ね達成できている。 ②-1 1年生96.0%、2年生94.0%で達成できている。 ②-2 ベネッセ総合学力テスト11月では、1年生：国語+1.1点、数学+7.7点、英語+4.1点で達成できた。2年生：国語+4.8点、数学+3.5点、英語+2.3点、地歴・公民・理科では地理、化学基礎、生物基礎、物理、化学で全国平均を下回った。 ②-3 教員の教科指導研修会等への参加率は78.0%であった。 ③ 学校全体でのICT関連の教職員研修は実施されなかったが、年間6回実施された教科「情報」に関する教職員研修は該当	(評定) B		
				(所見)		
				①-1 学習時間の総量が不足している現状が見られ、生活の改善と自主的に取り組む学習の重要性の再認識を改めて徹底し、家庭学習時間を拡充させる必要がある。 ①-2 部活動後は早く帰宅するなど、時間を有効利用し、午後9時までに学習を開始して家庭学習の総量を拡充させる必要がある。 ①-3 補習の欠席・遅刻は一部の生徒に集中しており、保護者と連携して指導を継続する必要がある。 ②-1 「予習」「復習」の必要性や「授業」とのつながりを生徒が実感して取り組めるよう、教科会を中心に指導方法のさらな		

			者 5 名の教員が全て受講した。		る工夫や改善に取り組まなければならない。 ②-2 1 年次では全科目で平均点を上回るも、2 年次になると下回る科目も見られる。科目数の増加に対応できていない現状が見られ、その改善策としては家庭学習時間の拡充が最優先である。各科目の基本的事項の習得を徹底するとともに、科目バランスを考えた学習・生活指導を行う必要がある。また大学入試の傾向を注視しつつ、教科主任を中心に出題傾向や内容の分析を継続し、授業の進め方などについても引き続き研究していかなければならない。 ②-3 教科指導研修会等に、より参加しやすい環境を校内で構築する必要がある。 ③ 生徒用タブレットの不具合が多く生じた。	自己の成果を確認できるようなテストを実施する。 大学入試の分析を進め、求められる学力や傾向を正しく把握し、定期考査や実力テストに反映させる。また模試の過去問題研究を進め、習得すべき知識や技能を生徒が実感できるよう指導する。 教科指導研修会などの情報収集と共有に努めるとともに、担当学年に関わらず教科・科目内で受講者を割り振るなど、積極的な参加を促進する。 ネット環境のさらなる改善とタブレットのスペックを上げるなどの対策が必要であると感ずる。回線に不安はあるものの、アクセスポイント工事により、特別教室においても使用できる所が増えたので、授業での活用を少しでも増やしていきたい。
		活動計画	活動計画の実施状況			
		①-1,2 生活記録表や生活実態調査を通して、現状の把握に努める。家庭学習が不足している生徒には担任が面談を実施し、原因の解明と改善を図り、具体的なアドバイスを行う。また進路説明会等で、家庭学習の現状とその重要性を保護者に認識してもらい、積極的なサポートを依頼する。 ①-2 補習に参加することの重要性を繰り返し指導する。担任、学年主任と連携し、遅刻・欠席が目立つ生徒には継続的および段階的に指導を行う。 ②-1 予習、授業、復習の学習スタイルを確立させ、課題や確認テストを実施し、授業内容の理解とその定着を図る。 ②-2 校外模試実施後に訂正ノートを作成し、誤答箇所の見直しをさせる。また教科会で模試の検討を行い、事前と事後の対策を練る。 ②-3 教科指導研修会の情報を周知し、事後は教科会や資料の閲覧を通して情報の共有を図る。 ③ I C T 機器を用いた授業を積極的に行うなど、授業改善に努める。	①-1,2 生活記録や生活実態調査を実施した。個人面談の機会を重視し、生活記録を基に具体的な生活改善に関するアドバイスを担任が行った。また学年 P T A では現状の報告と改善を依頼し、家庭と学校が協力できる体制の構築に努めた。 ①-3 学年集会では補習の意義や進路意識の高揚について指導した。補習の欠席が目立つ生徒には、個人面談を実施するなど、担任や学年主任を中心に個別指導を継続した。 ②-1 授業外で生徒が取り組むべき学習課題を明確にし、授業に集中できる環境を構築するよう各教科で改善を重ねた。 ②-2 模試受験前には過去問題研究を行い、受験後は訂正ノートの作成を促すなど、教科担任を中心に学力向上に努めた。 ②-3 Web形式での教科指導研修会が充実し、参加しやすい環境が整った。 ③ 電子黒板の積極的利用はできているが、1人1台タブレットの活用は、通常の授業での活用はまだまだという教員が多い。特に総合的な探究の時間には、タブレットを積極的に活用した。			
3 生徒指導	①基本的生活習慣の確立 ②生徒1人1人応じた支援と安全指導の徹底 ③社会の一員としての公共心の育成 ④いじめ等問題の未然防止、早期発見、早期解決	評価指標 ①-1 頭髪・服装の違反者を減少させ、再点検指導生徒の割合を1%以内にする。 ①-2 遅刻者の数を昨年度より3%減少させる。 ①-3 教員による登校指導を月1回、生徒による「あいさつ運動」を学期に1回実施する。 ②-1 自転車交通事故数を10件以下にする。(昨年度9件) ②-2 生徒自らが、心身ともに健康で安全な生活を送ることができるための知識や実践力を身につけさせる。 ③-1 学校安全の日の立哨指導や交通マナーアップキャンペーンを通して自転車の交通マナーの向上に努める。特に並進通行、ながら運転の防止に努める。 ③-2 携帯電話の安全な使い方についての講演会を年1回以上実施する。 ④-1 「いじめは人間として許されない」と100%の生徒に認識させる。 ④-2 「学校は好ましい人間関係の構築のため学校行事やホームルーム活動・授業に真剣に取り組んでいる」と答えた生徒の割合を90%	評価指標による達成度 ①-1 再点検を実施したした生徒は0名(0%)であった。 ①-2 2 学期末の状況で遅刻数が194(52%)増加した。 ①-3 学校安全の日における登校指導は計画通りに実施できた。挨拶運動を生徒会が積極的に行ってくれた。 ②-1 自転車交通事故数(9件)昨年と同数であった。 ③-1 学年集会など機会あるごとに交通マナーについて注意喚起を促した。 ③-2 スマートホン安全教室を徳島県消費者協会より数回講師を招いてzoomで行った。 ④-1 いじめアンケートを学期ごとに行い、「いじめは人間として許されない」と100%の生徒が認識している。 ④-2 「学校は好ましい人間関係の構築のため学校行事やホームルーム活動・授業に真剣に取り組んでいる」と答えた生徒の割合が96%だった。	総合評価 (評定) A (所見) ①-1 服装頭髪について数値目標を達成することができた。 ①-2 遅刻の数が昨年に比べて1.5倍に増加した。 ①-3 教員側からの挨拶に対応する生徒は多いが、元気に自発的に挨拶ができる生徒は少ない。 ②-1 事故件数は昨年と同数であった。大きな事故は発生していないが交通マナーについての苦情等も多い。 ②-4 概ね目標を達成することができた。昨年度に引き続き感染防止対策に重点を置いた健康診断の実施や生徒保健委員による校内放送を実施した。また、生徒が興味関心を持てるよう生活習慣改善と学習効果をテーマとした文化祭の保健展や保健H R 活動が好評であった。次年度も学校医・学校薬剤師やカウンセラー等とも連携し、生徒の実	生徒指導というよりは、生活指導的な項目が多い。評定「A」であるので、次年度は生徒一人一人の自己実現に向けての取組を行ってほしい。 服装頭髪について大きく乱れている生徒はいないが、スカートを折り込んでいる生徒を見かける。注意すれば素直に直すその場しのぎの状態である。常日頃から清潔感ある身だしなみができるように連携協力をはかりたい。 雨天時や早朝補習がない日に遅刻が増加する傾向は解消されていない。 生徒が自己の健康管理に自主的・主体的に取り組めるよう支援することが重要である。そのためには、生徒がより興味関心が持てるような情報の提供を工夫し、実際に継続して実践し習慣化できるように内容の保健だよりや保健展・保健H R 等による啓発に努め、家庭へも周知できるように取り組みたい。	
		活動計画	活動計画の実施状況			
		①-1 月初めのクラス単位の服装頭髪指導、学期初めの学年一斉指導を実施する。常日頃から清潔感のある制服の着こなしができるように、学年団	①-1 学期はじめの全体指導やクラス単位での点検を計画通り実施、また廊下などでの常時指導により、極端に服装頭髪が乱れ			

		と連携・協力をしながら常時指導を徹底する。 ①-2 遅刻指導週間を実施するとともに、多遅刻生徒の指導を徹底する。 ①-3 生徒会や生活委員と協力しながら自発的な挨拶を喚起する。 ②-1 登校指導を月1回以上、警察署やPTAとの合同指導を年3回実施する。 ②-2 交通事故の状況について、職員・生徒・保護者の共通理解が図れるよう、情報を提供する。 ②-3 交通安全講話を実施する。 ②-4 (ア) 健康診断と事後措置の徹底を図り、生徒の健康状態の把握と疾病の早期発見・事故防止に努める。 (イ) 保健だよりや生徒保健委員会活動・健康に関するH R活動や講演・学校保健委員会等を通じて、生徒の健康課題に合った情報の提供や啓発を行う。 (ウ) 相談室やカウンセラーを活用し、不登校傾向や悩みを持つ生徒や保護者の支援に努める。 (エ) 校内外の関係者と連携を図り、特別な支援を必要とする生徒への対応や支援を行う。 ③ 各関係機関と連携し、交通安全教室、携帯電話安全教室を行い、自転車の交通マナー、情報社会におけるモラルを身につけさせる。 ④ 生徒の日常の言動と行動に注意を払い、不適切な場合はその都度指導する。また、生徒一人一人を尊重し、面談等を実施していじめ防止に取り組む。	た生徒はいなかった。 ①-2 月に5回以上の遅刻をした生徒が10名いた。雨天時や早朝補習のない日に遅刻が増加している。 ①-3 生徒会による挨拶運動を実施した。 ②-1 登校指導を警察やPTAの協力の下予定通り実施した。 ②-3 二輪車等安全運転実技講習会を実施した。 ②-4 (ア) 健康診断は、多欠席者を除きほぼ100%の受診率であり、個別の事後指導により、生徒の健康状態の把握や事故防止につながった。 (イ) 毎月1回保健だよりを発行したり、生徒保健委員による感染防止の校内放送や生徒の健康課題に応じた保健展・保健に関するH R活動の実施や活発な委員会活動ができた。 (ウ) 相談室やカウンセラーを活用し、45件の生徒・保護者の相談や、別室登校の生徒の支援を行った。 (エ) 聴覚機器等の特別な支援が必要な生徒・保護者について、外部機関との連絡・調整等に努めた。 ③ 交通安全教室、スマートホン安全教室を予定通り実施した。 ④ 学期ごとに面談週間を行い生徒の悩みや生活を見直す機会を持つことができた。また、いじめアンケートなどによって生徒間のトラブルを早期に発見、対応することができた。	態やニーズに応じた内容での啓発活動や支援を実施したいと考えている。 ③-2 Zoomによる講演であった。通信状況は昨年までと比べて良好になった。 ④-1 いじめのアンケートではほとんどの生徒が良好な人間関係のもと学校生活が送れているようである。しかしながら小さいトラブルは起こっており、いじめに発展することがないように早期に面談等を行って解決している。	来年度自転車ヘルメットの着用が法令で努力義務となる。ヘルメット着用の呼びかけを粘り強くしていく必要がある。 ほとんどの生徒がスマートホンを所持、使用している。今までに起こっていなかったようなトラブルも発生し、その使用方法やトラブルなどの実態把握が難しく正確につかめていない。関係機関の協力を得ながら実態把握に努めたい。 いじめ事案は発生していないが、生徒間の小さなトラブルはある。いじめに発展しないように初期段階での面談等が必要である。
4 進路指導	①キャリア教育を推進し、主体的な進路選択に向けた支援の充実 ②生徒の能力（可能性）、適性、希望等を踏まえた進路指導	評価指標 ①-1 1, 2年次にオープンキャンパスや体験活動への参加、またWebや誌面での進路研究に1回以上取り組んだ生徒の割合を100%とする。 ①-2 ポートフォリオを利用し、校内外で取り組んだ活動の振り返りを行う生徒の割合を100%とする。 ②-1 2年次の9月の進路調査で、「進路目標が明確になっている」と回答した生徒の割合を100%とする。 ②-2 公務員セミナーや就職説明会などを通して自ら考える力を育て、就職を希望する生徒全員が進路を実現する。 活動計画 ①-1 あらゆる機会を通して「自分の生き方」を考えさせるとともに、体験活動や進路研究に関する情報の提供に努め、2年生終了までに必ず1回以上取り組ませる。 ①-2 ポートフォリオの意義とその利用方法を周知し、振り返りと記録を徹底させる。 ②-1 生徒や保護者に進路情報を提供し、各自の進路目標を設定させ、その実現に向けて主体的に学習する態度を育成する。また「若楠」や「進路ニュース」を活用し、進路意識の高揚を図る。 ②-2 望ましい職業観、勤労観の育成に向け、公	評価指標による達成度 ①-1 1, 2年次の全生徒（100%）が進路研究を行った。 ①-2 紙媒体を利用して、100%の生徒がポートフォリオを作成し、活動の記録、振り返りを行った。 ②-1 9月に実施した進路調査では、2年生のほぼ100%の生徒が進路目標が明確であると回答した。 ②-2 個別・全体指導を通じて情報提供や意見交換に努め、就職希望者は全員が就職内定した。 活動計画の実施状況 ①-1 web利用やリモート配信で実施されるイベントの周知を行い、積極的な参加を促した。実際に大学等のキャンパスに足を運んで参加していた頃よりも、より多種多様な大学等のイベントに参加する生徒が増加した。 ①-2 振り返りレポートの作成を通し、自己の取組を客観視できるよう促した。 ②-1 「若楠」「進路ニュース」「学年PTA資料」「学年集会スライド」では、入試や進路情報を掲載・周知し、進路意識の高	総合評価 （評定） B （所見） ①-1 ホームルーム活動や学年集会を通して進路研究の重要性を継続して指導した。web利用が主となったが、コロナ禍以前と比較し、オープンキャンパスへの参加率は高まった。 ①-2 時期を設定して活動の振り返りを行うことができた。今後はその利用方法を具体化し、進路選択に直結させる指導が必要である。 ②-1 2年生2学期までに具体的な進路目標を設定することはできているが、安易な選択に陥っていないかなど、個人面談を継続して確認・指導する必要がある。 ②-2 職業観・勤労観を十分に醸成して、就職することに対するイメージを生徒が具体的に描けるよう、個人面談および三者面談を継続する必要がある。ま	キャリア教育の中で一番重要なことは、生徒自身が自分を知ることである。活動計画の①-1、①-2の取組は好感が持てる。自己評価できる機会や場面を多くしてほしい。行動する機会を与えてほしい。 web利用が増加し、実体験を基にした進路研究が困難な現状が見られる。限定的な進路研究ではなく、多方面に視野を広げることでできる機会を得られるよう、幅広い情報の提供と機会の確保を行う。 3年間を通して、記録を長期的かつ有効に利用し、主体的な進路選択へさらに発展させられるよう、指導体制を拡充する。 進路ホームルームや個人面談をさらに充実させ、学年・時期に応じて求められる内容や課題を精選し、達成目標を明確にする。 就職を希望する者に対し、2年生後半から具体的なサポートをさらに拡充させる。特に、面談の機会を十分に確保し、生徒・保護者への情報提供や意向

		務員セミナーや就職説明会を通して職業理解を進め、働く意義を学ばせる。	揚に努めた。 ②-2 各種イベントを活用したり、生徒・保護者との情報の共有や面談を継続したりして、職業観や勤労観の醸成に努めた。	た情報収集とその情報の共有を継続し、望ましい選択を支援する必要がある。	を確認する機会を継続して設ける。
5 特別活動	①部活動や生徒会活動の活発化を通じて、所属感・連帯感を強化 ②ホームルーム活動や学校行事を通じて、温かい人間関係を確立	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	来年度は、コロナウイルス感染の状況なり対応が緩和されたの各行事の実施となりそう。 北高祭や予餞会などの行事を計画・実施する際は、感染対策に充分配慮しながら、徐々に元の姿に戻していくことを検討していかなければならないのではないか。中止することや、縮小することの方が、より困難な課題となりそうである。 生徒会の活動は各行事の実施に際して、自主的・積極的な活動ができていた。しかし、全校生徒全てが自主的・積極的な活動ができていないかという点、そこまでは至っていない。 各行事ごとの生徒や教員へのアンケートなどを参考にしながら、次年度に向けて生徒や教員の意見が反映されるよう、計画の段階から配慮していきたい。
		①-1 学校評価アンケートにおいて「学校行事に自主的・積極的に取り組むことができた」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ①-2 学校評価アンケートにおいて「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ②-1 学校評価アンケートにおいて「あなたは、学校行事や部活動に友人や仲間と協力して取り組み、友好的な人間関係を築くことができた」と回答した生徒の割合が、80%以上である。 ②-2 学校評価アンケートにおいて「生徒は学校行事に自主的に取り組み、望ましい人間関係を構築できている」と回答した教員の割合が、80%以上である。	①-1 「学校行事に自主的・積極的に取り組むことができた」が95%であり、目標を達成できた。 ①-2 「学校行事や生徒会行事には、生徒の意見が取り入れられている」が82%であり、目標を達成できた。 ②-1 「あなたは、学校行事や部活動に友人や仲間と協力して取り組み、友好的な人間関係を築くことができた」が96%であり、目標を達成できた。 ②-2 学校評価アンケートにおいて「生徒は学校行事に自主的に取り組み、望ましい人間関係を構築できている」が95%であり、目標を達成できた。	(評定) B	
		活動計画		(所見) 本年度も、コロナウイルス感染拡大の中での行事の実施となった。制限のある中で、前年度を踏襲した形での実施となり、難しい面も多かったが、北高祭は、文化祭・体育祭ともに、感染対策に十分注意した上で実施できた。制限もあったのだが、その中でもなんとか生徒の思い出に残るものが実施できた。 生徒会の活動も北高祭や、予餞会などの実施に際して、自主的・積極的な活動ができた。しかし、全校生徒全てが、自主的・積極的な活動ができていない。他の項目に比べて、「学校行事や生徒会行事には生徒の意見が取り入れられている」と回答した生徒の割合が低いことからわかる。 各行事ごとの生徒や教員へのアンケートなどを参考にしながら、次年度に向けて生徒や教員の意見が反映されるよう、計画の段階から配慮していきたい。	
		①-1 生徒会役員が中心となり各行事計画をたて、全校生徒が自己の役割や責任を自覚し、生徒の意見ができるだけ計画に反映できるようにする。 ①-2 各行事の事前・事後にアンケートを実施し、生徒自身に自らの取組についての状況を把握させ、今後の活動に生かせるようにする。 ②-1 各ホームルームでの人間関係を深め、生徒会や部活動での学年の絆を超えた人間関係も構築し、豊かな心を育成する。 ②-2 ホームルーム担任や部活動顧問という立場で、生徒の人間関係をよく観察し適切な方向に導けるようにする。	活動計画の実施状況 ①-1 生徒会役員は、率先して各行事の実施に際して、自主的に活動することができた、全校生徒が自己の役割や責任を自覚し自主的に活動できるようにした。 ①-2 北高祭などの大きな行事に関しては、生徒や教員にアンケートを実施し、次年度に向けて、改善できるようにした。 ②-1 各ホームルームでの人間関係を深め、生徒会や部活動での学年の絆を超えた人間関係も構築し、豊かな心を育成できるようにした。 ②-2 ホームルーム担任や部活動顧問という立場で、生徒の人間関係をよく観察し適切な方向に導けるようにした。		
6 国際理解教育	①豊かな国際感覚と英語コミュニケーション能力の育成 ②異文化理解、国際協調の精神の醸成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	本年度も新型コロナウイルス感染症のまん延により、海外での語学研修を実施できなかった。しかしながら、次年度の実施に向けて、準備をしており、引き続き事前研修に注力する必要がある。また、諸行事がオンライン形式となった。海外生徒や国際貢献に意欲的に取り組む団体等とのオンラインによる交流学習をより円滑にするため、ソフト面・ハード面での条件整備を課内で行うことが重要である。加えて、海外留學生の積極的な受入は、本校生の意識を高
		①② 異文化学習の機会を年間3回以上提供する。	①② 「国内語学研修」、「English Day」、「グローバルスタディーズプログラム」、「JENESYS2.0 日中高校生オンライン交流」、「スーパーオンリーワンハイスクール事業」の5事業を実施した。	(評定) B	
		活動計画	活動計画の実施状況	(所見) 「国内語学研修」、「グローバルスタディーズプログラム」については、コロナウイルス感染症の感染防止対策を徹底した上で、対面での活動や宿泊を伴う事業をすることができた。活動の中には発表の場もあり、プレゼンテーション技術の向上が見られた。「JENESYS2.0 日中高校生オンライン交流」や他の交流活動においても、あいさつや表面的な交流にとどまらず、国際社会における諸問題や国際貢献など様々な知識を背景にした意見交換を意欲的にすることがで	
		① 外部より講師等を招いて、グローバルな視点に立った考え方を受容するとともに、発信の練習をする。 ② 海外からの留學生の受け入れや、県内に在留する外国人との交流を通して、異文化に対する理解を深める。	① 「国内語学研修」では、福島県British Hillsにおいて、担当講師からディスカッションや英文学、イギリスの文化などについて学習した。「グローバルスタディーズプログラム」では、日本国内の大学や大学院で学ぶ留學生とともに、様々なテーマについて議論したり発表したりする機会を持った。「JENESYS2.0 日中高校生オンライン交流」では、中国の高校生と各班で決めたテーマについてのプレゼンテーションを行い、それぞれの文化や歴史についての意見		

			交換を行った。 ② 長期留学生として3名（ドイツ、フィンランド、デンマーク）が、短期留学生として1名（ブルガリア）が来校し、交流した。また、ENGLISH DAYでは国際英語科1年生が日本文化について紹介したり、国際英語科2年生が県内のALTとディベートしたり、国際英語科3年生が与えられたテーマに基づくプレゼンテーションを行った。 普通科1・2年生は、ALTへのインタビューと聞き取った情報を活用したゲームを実施した。ともに幅広い話題について話し合うなど交流活動を行った。加えて、「スーパーオンリーワンハイスクール事業」では、地域に暮らす外国人が住みよい街作りができるように、夏祭りやマルシェでの通訳や体験ブースの設置などを行った。	きた。		めるのに効果的である一方、留学生の資質で生徒に悪影響が出る場合も考えられるので、今後ともどのような留学生を受け入れるべきか、幹旋機関との連絡を密にし、できるだけ選ぶ段階で関わり、本校職員の意見を取り入れていくことが大事であると考ええる。
7 環境教育	①環境問題に取り組む態度と実践力の育成 ②脱炭素社会の実現に向けて、持続可能な社会の担い手を育成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	ボランティア活動に参加するように誘引してほしい。	次年度もこまめに節電・節水の声かけや教室掲示などを行うとともに、トイレや空き教室（芸術・体育など）、長時間使用しない体育館や多目的ホールなどの消灯を実施する。 校外清掃活動は以前のように大人数で実施することが困難であるが、身近なボランティア活動であることを、掲示物や呼びかけなどで周知し、より多くの生徒が参加できるように工夫する。 現状では校外のボランティア事業への参加は厳しい状況であるが、チャンスをみて生徒に参加を促していきたい。
		①-1 節電・節水を意識した学校生活を送り、使用量を前年度比－2％以下にする。 ①-2 「ゴミゼロの日」を設定することで、学校全体で環境問題について意識を高めるとともに、年間3回以上の学校周辺清掃を実施し、環境防災委員以外の参加者を毎回50名以上とする。 ② 校外で行われる環境美化及び環境問題に取り組むボランティア事業の参加を呼びかけ、年間10名以上の参加を募る。	①-1 環境・防災委員が手分けして、節電・節水を呼びかけ、使用料は減少した。 ①-2 今年度は2回実施したが、各クラスの環境・防災委員やボランティアを中心に毎回50人以上の参加があり、参加者は最後まで熱心の清掃活動に取り組んだ。 ②今年度は校外の各種ボランティア活動の案内が少なく、また感染症予防の観点から生徒への案内を控えることが多かった。	（評定） B		
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見）		
		①-1 掲示物や校内放送等での環境防災委員からの呼びかけにより、日中のトイレや移動教室時の消灯や節水の徹底を呼びかける。 ①-2 学校周辺や勝瑞駅等の清掃ボランティア活動を環境防災委員や生徒会・部活動生徒が中心となって積極的に行う。 ② 積極的な案内を行い参加を募る。また、その時の感想や体験談を各クラスに知らせる。	①-1 環境・防災委員によるポスター作りや呼びかけなどにより、節電・節水の徹底を進めた。 ①-2 今年度は勝瑞駅の清掃はできなかったが、学校周辺の清掃には環境・防災委員やボランティアを中心に、多数参加してくれ、最後まで熱心に取り組んでくれた。 ② 今年度は感染症予防の観点から案内を控えることが多かった。	校外でのボランティア活動の案内は殆どなかったが、校内では学校周辺清掃を2回実施することができた。環境・防災委員を中心に、生徒会の役員も数名加わり、時間一杯熱心に取り組んでいる。		
8 防災教育	①災害への対応能力・判断力・行動力の育成 ②自助・共助・公助の視点で、災害時に役立つ人材の育成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	徳島県においては南海トラフ地震の発生も考えられるため、防災教育はその後の人生においても大きな効果が期待できる。災害時に身を守るために自分ができる能力を身につけるようにさらに努力してほしい。	各種の避難訓練に対して一人ひとりが主体的に緊張感を持って取り組めるようにするため、各クラスの環境・防災委員に役割を持たせることが必要である。 避難訓練は4月・12月に実施しているが、2・3学期は長い活動期間の割に訓練が少なく、意識も弱くなりがちである。毎月1回実施されるJアラートを活用しながら、防災意識を高めることを検討してもよいと思われる。
		①-1 地震・津波及び地震・火災対応避難訓練をそれぞれ年1回早期に実施するとともに、想定外津波避難訓練も状況に応じて1回実施する。 ①-2 毎学期に環境防災委員から啓発放送等を行わせて、防災に対する意識を高める。 ② 校内外で行われる防災関係の行事を案内し、環境・防災委員以外の生徒の参加も募る。防災士講習会参加者については、4名以上の新規防災士登録者を目指す。	①-1 年度初めには、地震・津波避難訓練を実施。12月にはコロナ感染対策のため地震・火災避難訓練をZoomで実施し、グラウンドで消火器訓練を行った。 ①-2 啓発放送等は充分でなかったが、環境・防災委員会での活動や文化祭時の掲示物の作成により、意識の高揚に繋がった。 ② 今年度も募集したところ2年生2名、1年生2名が防災士試験に合格し、4名が新規防災士に登録された。	（評定） B		
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見）		
		①-1 避難場所や避難経路・方法などを充分周知させる。	①-1 今年度4月は実際に12月はZoomで避難訓練を実施した。各クラスにおいて避難	地震・津波・火災対応訓練等の実施時期は定着してきたが、コロナ感染予防の観点から、実施できなかった訓練もあった。 いざという時、職員・生徒の行動（避難行動）には不十分なことがある。 今年度の防災士講習には、4名の者が参加し、知識を深めることができた。		

		①-2 環境・防災委員が中心になって、毎学期に時期や当番、啓発方法などを決定し、全校生徒の防災意識の向上を図る。 ② 校内での防災関係講習会は3回行う予定であり、また校外講習会は案内が届きしだい案内及び募集する。防災士講習も同様に環境・防災委員を中心に募集し、文化祭時に活動報告を行うことで、その成果を全校生徒と共有する。	経路及び避難場所を確認することができた。 ①-2 啓発放送は充分実施できなかったが、学校のホームページに掲載し多くの人が見えるようにした。また、10月に避難所設営訓練を行い、避難所のルールや居やすい場所づくりを考え、防災士の方のアドバイスを受けながら避難所設営訓練ができた。 ② コロナ感染予防の点から各種講習会の案内は殆どなかったが、文化祭時に展示を通して、情報共有ができたと考える。また、10月には徳島県防災センターにおいて「南海トラフ大地震」のプレゼンテーションや防災クイズを行い、防災の知識を広げることができた。			また、防災士合格者に発表の場をつくり、地域の安全に役立つ人材育成をすることが必要だと考える。
9 主権者教育・消費者教育	①「18歳成年時代」を迎え、主体的に社会参画できる人材の育成 ②SNS上の契約トラブル回避など、自立した消費者の育成	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	1・2年生から積極的に取り組んでもらいたい。	選挙権年齢や成年年齢の引き下げにより、主権者として、また自立した消費者として必要な知識や能力を身につける教育の必要性はますます高まった。授業の中だけでなく、機会を捉えて外部の関係機関との連携も推進していきたい。
		① 主権者教育、消費者教育に関する授業や学校行事等を年5回以上実施する。 ② 主権者教育に関する行事等を実施したあとのアンケートで「政治や選挙への関心が高まった」と回答した生徒の割合を80%以上にする。	① 公民科や家庭科の科目、学校行事で評価指標を達成した。 ② 82%で評価指標を達成した。2年生で実施した模擬選挙（投票）時の調査では、95%の生徒が「投票には行きたい」と答えた。	（評定） B		
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見） 学校行事は、2年生が中心であったが、他学年では公民科や家庭科の授業を中心に「社会の一員として生きるために」ということを考えた。		
10 教職員の資質向上	①コンプライアンス（法令遵守）意識高揚 ②教職員1人1人が学校経営の当事者意識を持ち、組織として教育目標を実現 ③業務の効率化、ワーク・ライフ・バランスの改善	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	働き方改革の中で教員のワークライフバランスが注目されている。大きな転換期である。これまで当たり前だったことを一つ一つ見直し、よい方向に進んでほしい。	ICT等を積極的に活用した業務の効率化と行事・業務の見直しをすすめ、教員の負担軽減を図る。また、教員自身の意識改革もすすめ、年休の積極的な取得や勤務時間の削減によりワーク・ライフ・バランスの改善に取り組んでいく。
		① 年2回のe-ラーニング研修(コンプライアンス推進室主催)の全教職員受講と職員会議や職員朝礼においての注意喚起を年間12回以上実施する。 ② 目標管理シートを活用した校長との面談をすべての教員が年2回以上実施し、最終申告の自己評価で総合評価がB以上となるようにする。 ③ 出退勤管理システムを積極的に活用し、教員勤務時間の把握を行い、時間外在校等時間の削減に努める。また、部活動の適正化を図り、平日は午後8時までの生徒の完全下校を徹底する。	① 年2回のe-ラーニング研修は全教職員が実施できた。また、時機に応じた注意喚起も12回以上実施できた。 ② 目標管理シートを活用した学校長との面談は年2回実施することができた。目標管理シートの最終申告で、ほとんどの教員がB以上の自己評価を行った。 ③-1 業務改善シートを各課に配布し、次年度に向けた行事・業務の見直しを行った。 ③-2 出退勤システムを活用し、勤務時間の把握には努めているが、それが時間外在校時間の減少には至らなかった。	（評定） B		
		活動計画	活動計画の実施状況	（所見） 教職員のコンプライアンス意識は高く、研修等にも意欲的に取り組んでくれていた。また、目標管理シートを活用した教員の「育成・評価システム」も年度当初の目標に沿った1年間の効果的運用ができていた。しかし、ワーク・ライフ・バランスの改善については、部活動の適正化や業務の効率化をすすめる、教員の負担軽減を図らなければいけない。		
		① コンプライアンス推進のための年間計画に基づき、定期的な研修や啓発を実施するとともに時機をとらえた注意喚起を行うことでコンプライアンス意識の向上を図る。 ② 学校の教育目標を実現するための「教員の育成・評価システム」を確立し、全教員が年度当初の申告に基づいた教育ができるように管理職が積	① 年間を通じた計画的な研修と時機に応じた注意喚起を行い、教職員のコンプライアンス意識は高い。 ② 学校長との面談は、年2回実施して学校の教育目標に沿った効果的な助言と指導を行った。 ③-1 Classiを活用した学校評価アンケート			

		極的に助言や指導を行う。 ③ 出退勤管理システムの活用により教員自らがタイムマネジメントを行い、年休取得の励行と時間外在校時間の減少を努める。また、ICTの活用や業務の見直しをすすめ、業務の効率化を行う。	トやWEBテストの実施、Zoomによる学校行事や集会の開催等、ICTの活用で業務の効率化は図れた。 ③-2 平日の午後8時完全下校は達成できている。超過勤務システムを活用した勤務時間の把握は十分にできているが、それが勤務時間の削減までには至らなかった。			
II 新型コロナウイルス感染症対策	① 生徒及び教職員の健康管理 ② 学びの保障・継続	評価指標	評価指標による達成度	総合評価	コロナ対策に関しても変化していくと考えられるが、教職員や1, 2年生についてはこのコロナ禍で体験したこと感じたことを忘れないように今後の学校生活に生かしてほしい。	新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、行事計画等の立案が必要である。 タブレットの活用については、臨時休校等のリモート授業だけでなく日常の授業でのさらなる活用が望まれる。 臨時休校に対する対応はできても、少数の自宅待機者への対応は現時点ではできていない。この対応が次年度以降の課題である。 業務改善のため、引き続き行事の精選を検討する。 年間行事大綱に従って定期的に各種委員会を開催する。
		①-1 すべての教職員と生徒が朝タの健康観察を行い、健康観察表に記録する。また、感染症対応マニュアルに基づいた教育活動を実施し、部活動においても顧問がチェックリストに基づいた活動を行う。 ①-2 新型コロナウイルス感染症等による臨時休業が2日以上継続する場合は、学びを保障するためにタブレットを活用したリモート授業等を実施する。 ②-1 各課、各教科で校務及び行事の精選を行い、効率の悪いものを廃止して業務改善をすすめる。 ②-2 年間行事大綱に従って定期的に各種委員会を開く。	①-1 感染状況を鑑み、健康観察表の記入や提出は緩和されていったが、それまでに根付いた感染拡大防止の意識と責任感のため、校内の感染状況は最小限にとどまり、本校の教育活動に影響はなかった。 ①-2 学級閉鎖はあったものの、幸い長引くことがなく、リモート授業を実施する機会がなかった。授業ではないものの、共通テスト関連の説明会に、コロナ関連自宅待機者がタブレットを利用したオンラインでの参加はあった。 ②-1 業務改善のため、地球市民講座を特別活動課で実施することを廃止した。 ②-2 年間行事大綱に従って定期的に各種委員会を開催した。	(評定) B		
		活動計画	活動計画の実施状況	(所見) 新型コロナウイルス感染症による学級閉鎖はあったものの、数日間であり、リモート授業を行うほどではなかった。		
		①-1 新型コロナウイルス感染症対策と教職員及び生徒の健康管理を徹底し、学校でのクラスターを発生させない。 ①-2 学校が臨時休業になった場合は、タブレットを有効に活用したオンラインでの学習活動が行えるように校内の推進体制の整備する。 ②-1 徳島県GIGAスクール構想にもとづき、積極的なICTの活用により業務改善をすすめる。また、校内組織や学校行事の精選も行き、業務の効率化を図る。 ②-2 年間行事大綱に従って、定期的に各種委員会を開く。また、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況では、集会等の行事をオンラインで実施できないか検討する。	①-1 健康観察表を毎月配布し記録することで健康管理に努めることができた。 ①-2 学校が臨時休業になった場合は、一人1台タブレットを活用したオンラインでの学習活動が行えるよう、校内の体制を整えてはいたものの実際に使用したことはなかった。 ②-2 年間行事大綱に従って定期的に各種委員会を開催した。 集会等の行事に関しては、可能な限りオンラインで実施した。			